



Title	パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (III)
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 4, p. 161-197
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79518
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (III)

松 村 耕 光

The Anjuman-e Panjab and its Efforts to Refrom Urdu Poetry (III)

Takamitsu MATSUMURA

This is the third part of our study on the new poetical movement led by Muhammad Husain Azad. In this part, efforts have been made to examine the poetical peculiarities of the *mathnavis* written by Azad and Hali.

The contents are as follows:

Chapter 3. The *Musha'iras* of the Anjuman-e Panjab

- (1) *Mathnavi* "Shab-e Qadr"
- (2) The First *Musha'ira*
- (3) The Second *Musha'ira*
- (4) Tha Third *Musha'ira*
- (5) Tha Fourth *Musha'ira*

第3章 パンジャブ協会の詩会

パンジャブ協会を舞台とし、ムハンマド・フサイン・アーザードを指導者として展開されたウルドゥー詩の刷新運動の全貌については、資料的な制約のため、詳細に知ることは、今のところ難しい。資料として利用出来るのは、この刷新運動の中心であったパンジャブ協会の詩会に於いて発表されたアーザードやハーリーの詩であり、また、同時代に、この運動に言及しているフランスの東洋語学校ヒンドゥスターニー語教授ギャルサン・ド・タッシー(Garcin de Tassy)の講演等などである。このような資料的な制約に鑑み、本章に於いては、所謂「パンジャブ協会の詩会」で発表されたアーザードやハーリーの詩を、英訳、和訳がほとんどないので、引用を豊富に行ないつつ、詳しく検討することしたい。

従来のウルドゥー文学史に於いては、「パンジャブ協会の詩会」で発表された詩については余り詳しく分析・検討されていないような印象を受ける。特に、アーザードの詩は、その歴史的な重要性にもかかわらず、アーザードの詩人としての資質の欠如の故に、十分にこれまで分析・検討されていないように思われる。ウルドゥー近代詩を確立したハーリーの陰に隠れてしまっているアーザードの詩的営為を今一度確認するとともに、この詩会に4回参加したハーリーの詩も併せて検討し、アーザード、ハーリーの作品の分析を通じて、このウルドゥー詩刷新運動について考察し、ウルドゥー近代詩の成立過程を追認する作業の一助としようというのが本章の主たる目的である。

アーザードの詩について検討する前に、その詩のテキストについて簡単に検討しておきたい。既に第2章で紹介したように、アーザードがパンジャブ協会の詩会で発表したマスナヴィーは、『アーザード詩集』に収められているが、この『アーザード詩集』には、アーザードの息子アーガー・ムハンマド・イブラーヒームの編集によるものとムムターズ・アリーの編集によるものの二種類がある⁽¹⁾。アーガー・ムハンマド・イブラーヒームの序文の日付は、1899年7月24日であり、ムムターズ・アリーの序文の日付は同年6月30日で、ほぼ同時にラホールで出版されている。

アーガー・ムハンマド・イブラーヒームは、1910年に、ガザルやカスィーダ等を追加した第2版を出版したが、表紙に「美と恋の束縛から自由である」という謳い文句がある点、そして、この『アーザード詩集』がインド中の若い学生の許にあることから、1926年に第3版を出版したアーガー・ムハンマド・ターヒルは、ガザル、カスィーダ等の、マスナヴィーやナズム以外の詩を取り除いた。この版が、1957年まで、シャイク・ムバーラック・アリー (Shāikh Mubārak ‘Alī) というラホールの本屋から何度も出版された。筆者の手許にあるのは、この本屋から1938年に出版された5刷である。イブラーヒーム版の初版、第2版は、筆者は見えていないが、雑誌Sahifāhの1972年4号に掲載されている下記二論文で凡その内容を知ることが出来る――

1) Taḥsīn Sarwarī, “Taṣānīf-e Āzād ke tīn maṭbū‘ah nuskhē”

2) Yūnis Javīd, “Taṣānīf-e Āzād ke maṭbū‘ah nuskhē”

ユニス・ジャーヴィードによると、イブラーヒーム版『アーザード詩集』初版の構成は、ホルロイドへの賛辞、序文、アーザードの講演「詩と韻文についての考察」、1874年4月19日の講演会での講演と続き、その後、この4月19日の講演会で発表されたマスナヴィー「偉大なる夜」、そして、パンジャブ協会の詩会で発表されたマスナヴィーが続いている。但し、その順番は詩会での発表順とはなっていない⁽²⁾。その後にナズムが9篇（ナズムの間にカスィーダが1篇はさまっている）、次いでガザルの部の序文、ガザル6篇、「ベンへの呼びかけ」⁽³⁾ (Khitāb bah qalam)、様々な詩句という順となっている。

第2版では、第2版への序文が付けられるとともに、ガザルの部の序文の後に、雑誌『宝庫』 (Makhzan) 1901年11月号に掲載された『アーザード詩集』への論評が再録されている⁽⁴⁾。ガ

ザルは30篇増やされて36篇となり⁽⁵⁾、その後に、ガザルから抜き出された詩句、続いてカスィーダ8篇、サハラー1篇、「ベンへの呼びかけ」、様々な詩句という順番になっている⁽⁶⁾。

尚、1978年に、タバススム・カーシミーリーの編集によって『アーザード詩集』がラホールで出版されているが、詩のテキストは、シャイク・ムバーラック・アリーの出版した版に基づいている。

ムムターズ・アリー版は再版されたのかどうか不明であるが、その初版の構成は、まず、ムムターズ・アリーの序文で始まり、次いでイブラーヒーム版と同じように、アーザードが1867年8月に行なった講演「詩と韻文についての考察」、1874年4月19日の講演会での講演⁽⁷⁾、そしてマスナヴィー「偉大なる夜」と続いている。この後、ムムターズ・アリー版は、「慈雨」、「冬」、「希望の朝」という風に詩会での発表順にマスナヴィーが掲載されている。但し、ムムターズ・アリー版には、「文明の根源」(Maşdar-e tahdhīb)というマスナヴィーが含まれていない。マスナヴィーの後、ナズムが6篇掲載されている。(イブラーヒーム版初版に入っているカスィーダは、ムムターズ・アリー版には含まれていない。)このナズムの部分も、イブラーヒーム版とは次のように少し異なっている。

- 1) イブラーヒーム版では、“Nau ʔaraz-e muraşša’ ”という詩と“Ulū al-‘azmī ke liye kōī sadd-e rāh nahīn”という詩とは別個のものであるが、ムムターズ・アリー版ではこの二つの詩の題名が同一箇所に上下に並記されている。その内容は前者の詩であり、後者の詩は含まれていない。
- 2) イブラーヒーム版の、“Ēk tārē ka ‘āshiq”という詩は、ムムターズ・アリー版では“Tārē kā ‘āshiq”という題になっている。
- 3) イブラーヒーム版の“Ma ‘rifat-e ilāhī”という詩は、ムムターズ・アリー版では、“Mathnavī yād-e ilāhī”という題になっている。
- 4) イブラーヒーム版にある“Salām ‘alaik”という詩と“Miḥinat Karō”という詩が、ムムターズ・アリー版にはない。

ナズムの後にはガザルが8篇続き、その後、「ベンへの呼びかけ」、様々な詩句という順になっている。

イブラーヒーム版とムムターズ・アリー版を比較すると、同じ詩でもテキストにかなりの違いが見られる⁽⁸⁾。ムムターズ・アリーは、その序文の中で、アーザードは後年自分の詩を推敲し直したが、自分は元通りの詩を出版したと記しており、ムムターズ・アリー版を採りたくないのであるが、そうはいかないようである。というのもムムターズ・アリーという人物にはかなり問題があるようだからである。

1898年、ムムターズ・アリーは、アーザードの『アクバルの宮廷』を出版したが、その序文の中で彼は、次のように主張していた。

- 1) 出版社を設立したので、『アクバルの宮廷』を出版しようとアーザードの所に原稿をもら

いに行ったが、アーザードはこれを嫌がり、狂気の発作を起こして、原稿の束をラーヴィー川に投じてしまった。恐らく、これが『アクバルの宮廷』の決定稿であった。それで、アーザードの書庫から見つけた未決定稿によって出版したが、その原稿には配列の乱れや脱落があったので、仕方なく自分が手を加えた。

2) 年号や人名等の明白な書き誤りは、これを訂正した。

3) アーザードは、様々な人物について、付録をつけるつもりであったが、簡単な原稿を残しただけであったので、自分が編集して付け加えた。

このようなムムターズ・アリー的主張に対し、『アクバルの宮廷』第2版の序文の中で、アーガー・ムハンマド・イブラーヒームは次のように反論している。

1) アーザードの本を出版したいと言って来たので、ムムターズ・アリーに『アクバルの宮廷』の原稿を手渡したが、これは決定稿であった。

2) 年号の訂正は、それはそれで良いが、ムムターズ・アリーが例として挙げている人名の訂正は、正しい名前を逆に誤ったものになっている。

3) 付録はアーザードによって執筆されたもので、その原稿も残っている。

アスラム・ファッルキーによると、ムムターズ・アリーは、アーガー・ムハンマド・イブラーヒームの以上の反論に対して何も答えなかった。またファッルキーによれば、『アクバルの宮廷』の原稿は、決定稿であり、付録も執筆されているのを確認したとのことである⁽⁹⁾。

『アーザード詩集』の出版されたのは、『アクバルの宮廷』初版出版の翌年であり、上述のような事情を考慮すると、ムムターズ・アリー版は、あまり信用する訳にはいかないのである⁽¹⁰⁾。従って、本章においては、イブラーヒーム版の系統を引く、シャイク・ムバーラック・アリーが1938年に出版した『アーザード詩集』（5刷）とタバッスム・カーシミーリー編集によるものを主要テキストとすることにする⁽¹¹⁾。

（1）マスナヴィー「偉大なる夜」

まず最初に検討すべきは、1874年4月19日、パンジャブ協会で開催された、ウルドゥー詩改革のための講演会で、アーザードが、ウルドゥー詩の現状打破を訴える講演の後、新しい詩の姿を示すべく発表した「偉大なる夜」（Shab-e qadr）というマスナヴィー詩である⁽¹²⁾。この詩は、115詩句より成り⁽¹³⁾、「偉大なる夜」という詩題が付けられているが、内容は、一般の夜の情景の描写であり、コーランが啓示され始めたと言われるラマザン月27日の「偉大なる夜」とは内容的には無関係である。

アーザードは、このウルドゥー近代詩の出発点となる歴史的な詩を次のように始めている――

おお、太陽よ、朝から出ているのです、汝は

世界の活動の中を一日中動き回ったのです、汝は
汝の歩みは世界の断えざる昼夜

この労働の酒杯は、多かれ少なかれ、汝のもの
日中の苦しみで汝の顔は青白いのです

そしてその上に夕刻が貧困の埃をかけたのです
世界は夕刻に結び付いているので

そして汝もまたこの世の事に疲れているので
山の麓に行って、さあ、眠るのです

一日の仕事を夕刻に教えて眠るのです

次いでアーザードは、夜に対して次のように比喩を多用しながら呼びかける――

来たれ、おお、黒い夜よ、夜の美女^{ライラー}なのです、汝は

この世の麝香の家の王女なのです、汝は
汝の訪れの素晴らしさを書き記しましょう

しかしこれ程の墨を何処から持ってきてきましょう
夕刻の後、夕焼けの中に汝が現われることは

汝の黒檀の御輿が飛ぶことなのです
昼であっても、あの光景が目の中にあったのです

黒い絹の布の波立ちが
汝の軍勢が今や空に輝くことでしょう

勅令、命令を受けてそれは世界に飛んで行くことでしょう
朝となるまで世界の作業場が閉められるように
休息が普き命令となり、活動が停止するように

おお、夜よ、汝の頭上には王冠があると聞いています

その全ての宝石はアビシニアの国の貢物なのです
あらゆる明細を書いているのに何も読めないのです

あまりに暗く、何も目に入らないのです
この色の上にどのような輝きを見せているのでしょうか
汝の輝く顔は黒い太陽なのです

夜が訪れ、人々は眠りに就く。アーザードは様々な人々の様子を描写してゆく。まず、労働者の様子が次のように描かれる――

労働者達は至る所で苦しみ、痛みを得ていたのです

そして足にまで頭の汗を流していたのです

重い荷を貧しい者達は頭に載せているのです

4 パイサを持って夕方家に帰ってくるのです

おお、夜よ、終日の難儀によって疲れ果て

汝の支配下で足を伸ばして眠っているのです

このようにアーザードは、従来の伝統的なウルドゥー詩に於いては詩材とされることのなかった労働者というものを詩の中に取り込みつつ、さらに、旅人の描写を行なった後、金持ちと貧乏人の様子を次のように対照的に描写している。

この時、数人の貴族は王子ペーナズィールなのです

玉座の空には王女バドレムニールがいるのです⁽¹⁴⁾

昼の色は褪せ、今や別の色があるのです

夜の帳の中で薔薇色の酒の巡回があるのです

一人の薔薇の顔^{かんばせ}が目の前で媚態を尽くし

そして半開きの眼^{まなこ}が酒杯を与えているのです

門をかけて部屋の中に今や閉じ込め

そして逢瀬の寝台で結ばれるのです

多くの金持ちは富の誇りに横たわるのです

しかし彼等の心を見ると悩みの中にあるのです

安楽の道具が全て提供されているのです

望むものは世界が捧げて持っているのです

ビロードの床であるのに安らぎがないのです

目をつぶろうとしても、それすら出来ないのです

彼等の他にも世間には数多くの人がいるのです

安息は数多くの道具を与えているのです

昼であろうと夜であろうと彼等には何の仕事もないのです

そして仕事といえば休らぎがないということなのです

彼等もまた横たわって人生の悦楽を求めているのです

刺の上で悶え苦しんで夜を過ごすことになるのです

そして彼等の陰に一人の貧者が横たわるのです
それは終日荷を担ぐ、憐れな者なのです
朝早くから仕事のために家を出ていたのです
彼は適法なことを行なって夕方家に帰って来たのです
今、自分の固くなったパンを水に浸して
食べ、そしてかまどでうっとりと横になっているのです
頭上に最後の審判の日が来ようと彼は気づかないのです
眠り（金）は目の中にあるのに、側には金はないのです

アーザードが、以上のように、詩の中に労働者や貧者を取り入れたことは、アーザードが、既にガザルの発想から離れ、ナズムの発想を持てるようになっていたことを示しており、非常に興味深い。

さて、続いてアーザードは、夜でも活動している人々の様子を描いてゆく。まず登場するのは、書物の解釈に忙しいムッラー（宗教指導者）であり、そしてその後、試験勉強中の学生、計算が合わず困っている商人、自分のホロスコープの計算に熱中する占星術師、人の家に侵入しようとする泥棒、詩作に没頭する詩人の様子が描写される。ムッラーや詩人の描写には、アーザードのムッラー、詩人に対する揶揄が見られる――

少し考えてみるのです、偉いムッラーのことを
首を傾けてランプ台の足元に坐っているのです
目を本文にもそして欄外にも向けているのです
時には内容が互いに混乱しているのです
あらゆる単語に新しい意味を着せるのです
即ち、新しい創造力を示すのです
しかし時には真の意味から離れてしまい
自分で勝手に嘘の論証を行なうのです
休息と睡眠を禁じて坐っているのです
虫のようにこの暴君は本に食らいついたのです

この暗い夜の帳の中で泥棒である詩人は
盲人のように手探りで歩いているのです
意味を詩句から、内容をガザルからとり
しかし、次のように、包みを変えて持ってくるのです
詩句を聞く人達はそれを賛めそやすのです

その人達の歌った内容なのに、その人達はうっとりとなっているのです

この後、アーザードは、次のように言う――

世界はその安息の寝台で夢の中にあるのです

アーザードは首を垂れて神の御前にいるのです

請願者のように手を伸ばして

そして衷心から何度も祈るのです

私は権力にも財産にも関心がないのです

世間のごたごたには関心がないのです

おお、主よ、お願いしたいのです、もし恩情を与えて下さるのなら

心に感銘を与えるような言葉を舌に与えて欲しいのです

以上の詩句の中に、従来の詩人に対する批判と、世俗的な名声ではなく、感銘を心に与えるような言葉を詩人は求めるべきであるというアーザードの主張を読みとることが出来よう。

アーザードはさらに詩を続けて、神を念じる宗教家、河を行く舟、子供を寝かす母親、死の床にある病人の様子を描写し、そして次のようにこの作品を結んでいる――

アーザードよ、汝の言葉の妙味に称賛を

しかし、今や夜は天に寝返りをうたせたのです

全ての人は各自の仕事に心を向けているのです

汝は何故惰眠の酒を飲んで座しているのですか

少しの間は正気と理性によっても事を行なうのです

夜明けは近いのです、アッラーの御名を唱えるのです

ムムターズ・アリーによると、この詩を聞いた者達は、この詩が読まれた時、全聴衆の上を静寂と沈黙が覆ったと述べているとのことである⁽¹⁵⁾。

（２）第１回詩会⁽¹⁶⁾

1874年５月30日に開かれた第１回詩会の詩題は「雨季」であった。ラホールは６月頃から雨季に入るので時宜を得た詩題であった。

ギャルサン・ド・タッシーによると、この詩会は、先の講演会よりも盛会で、数多くの著名人、裁判所の高官、名士達が後援し、政府の高官や役人、カレッジやマドラサの教官や学生、パ

ンジャープ・ユニヴァーシティ・カレッジの構成員や知識人が参加した⁽¹⁷⁾。

詩会はまずハーリーの詩から始められ、その後、モウラヴィー・アルターフ・アリー (Mau' lavī Alṭāf 'Alī) という、『ガヴァメント・ガゼット』のウルドゥー語翻訳官が詩を読み、さらに5人の詩人が詩を発表した。

ギャルサン・ド・タッシーが引用している、1874年6月5日付のパンジャープ協会の会報は、この詩会について次のように伝えている。

「この詩会は、十分に有益であることが証明され、以下のことが強く期待出来る。即ち、将来の詩会は一層成功するであろうし、パンジャープ州政府やホルロイド氏が、詩会の設置について抱いていた一つの素晴らしい目的——即ちウルドゥー詩は腐敗した詩想や馬鹿げた内容から清められ、そしてそれらの代わりに、世界の色々な事物の詳しい姿が提示されなければならないという目的——は、私の意見では、完全に達成されるであろう、と。」⁽¹⁸⁾

詩人達が詩を発表し終えると、教育局長ホルロイドは、著名なインドの文学者による委員会を設置し、報奨すべき詩を選定させようと述べ、その後、次回の詩題を冬とすることが決定された。

アーザードは、この詩会で、「慈雨」(Abr-e karam) というマスナヴィー詩を発表した。これは98詩句から成り⁽¹⁹⁾、次のように始められている。

革命の書の秘密を知る人達は

昼夜を書物の頁と心得ているのです

彼等の前には過去、現在の記録があり

それは前で映像の鏡を見せているのです

過去の王達の姿は素晴らしく

その中では全て、遠い時代も近い時代も輝いているのです

運命は前に新しい書面を持って来るのです

次々と新しい絵が前にやって来るのです

この夢き国の在り方は変わっているのです

一瞬の内に姿は変わり、次の一瞬には別物となるのです

革命の法がここでは慣わしであり

季節毎にそこには新しい王がいるのです

今、ここで数日前から広まっている法は

夏の王の熱き統治なのです

続いて厳しい夏と雨雲の到来が描写される——

世界は炎を放ち、天は炎を降らせていたのです

熱い支配があるかと思えば厳しい支配があったのです
大地の顔を見ると土が舞っているのです
そして空の下の方を埃が舞っているのです
世界では水の一滴を人々は追い求め
水の代わりに火が天から降り注いでいたのです
町では乾ききって花園は荒地となり
そして森では日差しによって鹿は黒くなったのです
植物の子供達は渇きのために泣き出し
神の被造物の泣き声はずっと遠くにまで及んだのです
水銀となって胸からあらゆる心が消え去ったのです
そして太陽は蠟燭のように溶け去ったのです
これらの心は渇きのために落ち着きをなくし
人は悶えて水を奪われた魚となったのです
しかし今や雨季の王の支配の時なのです
天を栄光の雲が覆っているのです
夏の熱はすっかり消え去り
そして天と地の色彩は一変したのです
朝夕の安息の命令が下されたのです
神の被造物の命に休息が訪れたのです

次いでアーザードは、雨季の到来を告げる雨雲に、こう呼びかける――

おお、雨雲よ、来たれ、汝は雨季の王
あらゆる乾湿は汝の恵みによって繁栄するのです
汝の支配のために世界の色は変わり
汝の地は変わり、汝の天は変わるのです
光沢と色彩の正月^{ノウロズ}、世界の春なのです
汝はインドの国の春なのです

そして雨で世界や甦る様を、アーザードは次のように描写する――

汝の雨滴の一粒一粒が生命の水の滴なのです
生命を得るのです、汝によって、植物の世界は
汝は植物の子供にとっては乳なのです

そして年老いた樹木にとっては生命なのです
おお、雨雲よ、汝の乳の力を何といえましょう
種子は山を切り裂いて現われ出るのです
汝によってあらゆる花園の若木は緑なし
そして樹木の裳裾は果実に溢れるのです
これは花や実が外に現われ出ているのではないのです
春の勇気が外へ姿を現わしているのです
時には緑の絹織物を大地に纏わせ
花によって時には額を開花させるのです
天に対して時には魔法の世界を現わし
一つの色の中に時には百の色を見せるのです
朝の水銀の中に時には辰砂を混ぜ
そしてあの中国の画廊を開くのです
時には何か変わった興奮をもたらし
空に雲の外套を着せるのです
このように世界の色は刻々と変わるのです
おお、雨雲よ、何処でこの手品を学んだのですか

この後、雷の情景や、雨雲の到来を喜ぶ植物、鳥、人の描写、山の様子、河の様子等の描写が続いている。詩の終わり近くの一部を次に訳出しておこう。

雨滴の中で揺れているあの木々の枝
そして緑の花壇のあの花々の赤い色
枝の中を水の滴が滴ってゆくのです
花壇は満ち、貯水の穴は溢れているのです
流れる水の溝で波打つ様
そして草地の上を洗って綺麗にする様
あの滝の布が力強く落下する様
そしてあの庭が水の音で響き渡る様
山や荒野に池の水が溢れ
まるで薔薇の酒杯が溢れているかのよう
至る所で花園の鳥が群れをなし
互いに鳴きながらじゃれ合っているのです
カッコウが遠くの木の上で鳴くことがあります

そして痛みある人々の心に手術刀を刺し入れることがあるのです
クジャクが尾羽を扇にして踊ることがあり
そして雌のクジャクが涙の真珠を調べることもあるのです
しかし花園からクジャクが踊って出て行くと
山鶉がからかって大笑いするのです
一本のタマリンドの木にブランコがぶら下がり
そしてその横でマンゴーの実が熟れ落ちているのです
ブランコには若者達が乗っているのです
そして子供達はマンゴーの笛を吹いているのです
サーワン月（雨季）の歌が心に嵐を引き起こしているのです
他郷にある人々の思い出で心には願い事があるのです
雨季マルハールの歌の旋律には陶醉ざわめきの騒乱があるのです
雲は鳴って身を隠して太鼓の音を立てるのです

この後、アーザードは、雨季の夜の様子を描写してこの詩を終えている。

次にハーリーの発表した詩「雨季」（Barkhārut）について見ておこう⁽²⁰⁾。これは144詩句からなるかなり長いマスナヴィー詩で、ハーリーの、この詩会に対する熱意が感じられる力作である⁽²¹⁾。冒頭の部分をまず訳出しておく。

炎暑の苦しみを消し去る者
冷気の知らせを持ち来たる者
自然の驚異の鉞脈
神秘家にとっての叡智の書
あの枝と樹木の若さ
あの蟻とバッタの生命
あの一年の生命——雨季
それは何者？ 神の御威光——雨季
やっと来たのです、多くの祈願の後に
そして何百という懇願の後に
それが来たら生命が甦ったのです
さもなくば皆、数日の生命であったのです
暑さに生ある者は悶えていたのです
そして山は日差しに熱せられていたのです
砂漠の砂は熱い灰以上であったのです

そして川の水は沸騰していたのです
花園は略奪が行なわれているかのようで
そして森には火事が起っているかのようであったのです
トカゲは穴に顔を隠し
そして動物は喘いでいたのです
狐は舌を出しており
そして熱風のために鹿は黒くなっていたのです
チーターには狩りへの関心がなく
鹿には隊列への関心がなかったのです
虎は沼地に物憂げに横たわり
鱶は河で物憂げにしていたのです
家畜の体は細くなり
雄牛は肩を落としていたのです
水牛の体内には血液がなく
そして雌牛の胸には乳がなかったのです
馬はえさを食べず
渴きの鞭が馬を打っていたのです
熱の炎が起こり立ち
そして全ての者の精気が脱け出していたのです

この後、暑さに苦しむ人間達の様子が活写される――

簾の中で或る者は日を過ごし
地下室に或る者は顔を隠すのでした
商店街は全く人気なく
人の姿は目に入らなかったものでした
昼夜繁昌していた店の主人達は
手持ち無沙汰に坐っていたのでした
もし何か人々の集まりがあったとすると
それは水飲み場だったのでした
町には人の欠乏があったのです
スルターンの井戸にのみ人が群がっていたのです⁽²²⁾
水によって全ての人の生命があったのです
水のある所には人だかりがあったのです

水を求めて心は走り
 ^{フールーダ}
 冷果のためにつばが滴るのです
果実、花の水々しさを見て
 心と肝は水々しさを得ていたのです
果物売りの売り声は心地良く
 開くと口につばが溢れるのです

アーザードが厳しい暑さの描写にわずか7詩句程しか用いていないのに対し、ハーリーは、約40詩句に亘って細密に描いているので、この後に続く雨雲の到来と雨で甦る自然の姿の描写が効果的なものになっている――

雨季の太鼓が鳴っているのです
 一つの騒ぎが天に起こっているのです
雲の軍勢が先を行き
 そして後方には風の大軍が従っているのです
色々な騎兵がいるのです
 或る所では白く、或る所では黒いのです
天空には兵営のようなものが広がり
 やって来る軍勢もあれば去って行くものもあるのです
戦闘に赴くかのように思われ
 一緒に数十万の大砲も行くのです
砲列が進み行く時
 大地の胸は震え立つのです
激しい雨が地面を打ち
 暑さの舟を沈没させたのです
雷が時にはきらめき
 目に光のようなものが走るのです
真っ黒な雨雲が覆っているのです
 天国の風が吹いて来るのです
ずっと目の届く所には
 神の全能の御力が目に入るのです
太陽は顔に覆面をし
 そして日差しは荷物をまとめたのです
庭は床上げの沐浴を行ない

田畑は緑の衣も得たのです
畦道も道路も姿を見せず
見当をつけて馬は道を歩いて行くのです
石や木は同じ制服を纏い
世界はすべて瑠璃色となるのです
花々によって山は覆われ
樹木は花嫁のようになっているのです
湿地は水に満ち
森中が響き立っているのです
パピーハー鳥はピーハー、ピーハーと鳴き
そしてクジャクは至る所で鳴いているのです
カッコウの鳴き声は心を酔わせ
あたかも心に染み入るかのようなのです
蛙が鳴き出すと
世界を引っくり返すような騒ぎを起こすのです
皆、神の御恵みの食卓に満ち足りているのです
水中では鰐が、湿地では虎が
金持ちはその富みに酔い
貧しい者はその身に酔っているのです

この後、ハーリーはムスリム、ヒンドゥー、シク、ジャイナ教徒等の様子を次のように描いている――

雲が家の空に現われたのです
全ての口には喜びの言葉があるのです
モスクには敬虔な人々の祈りの言葉があるのです
「おお主よ、我等に利益があり、損失がありませんように」
寺院ではあらゆる人がこう言っているのです
「雲の王よ、汝の慈悲が得られたのです」
グラント（シク教聖典）読誦者は師^{グル}を呼び
カビール派は賛歌を歌っているのです
或る者は雨^{マール}季^{ハール}の歌を歌い
故郷では誰かが口ずさんでいるのです
大麻中毒者は酔って歌って歩くのです

そして笛を吹いて歩くのです
サルワンの歌を誰かが坐って歌っているのです(23)
誰かがヒール・ラーンジャーを始めたのです
ジャイナ教の偉い守護者達は
灯火に覆いをかけて回っているのです
彼等はこのようにして命の保護を行なうのです
一匹の蛾も焼け死んだりせぬようにと

これに続けて、雨季の称賛があり、ブランコ遊びをする少女達や激流となった河の写実的な描写がある。よく引用される、ブランコ遊びをする少女達の箇所を訳しておく。

柱が庭の至る所に打ち込まれているのです
ブランコがあらゆる所にぶらさがっているのです
小さな女の子達が数人いるのです
女の子達の今日は遊びの日なのです
全員が喜びに胸をふくらませ
そして順番にブランコを揺すっているのです
皆と一緒に歌を歌い
森中に歌声を響かせるのです
一人が皆を、立って、揺すっているのです
一人は落ちるのではないかと恐がっているのです
その中の誰かが^{マルハール}雨季の歌を歌うのです
そして別の子がブランコを大きく揺するのです
時には誰かがブランコで歌う歌を歌い
誰かが他所の恋の歌を聞かせるのです
一人がブランコから振り落とされ
皆は大きな声をあげて笑うのです

ここまでで既に115の詩句が費されており、ここで詩を締めくくっても良かったのであるが、ハーリーはさらに筆を進め、異郷にあって苦しんでいる一人の男の姿を描写し始める――

自分の身心を厭う者が一人
故郷の仲間から離れた者が
異郷の難儀に打ちひしがれた者が

歩く力すら持たない者が
悲しみを分かち合う者も心を慰めてくれる者もなく
一人、庭園の川の畔に横たわっている
旅の苦しみが頭の中にあり
自分のことも知らず、家のことも知らずに

雨雲が来、雷が鳴り出すと、この者は故郷のことを思い起こす。雨季という心踊る季節に一人
異郷にあることのつらさが、

マンゴーの季節が来、そして友がいないのは
我が心はそのような季節を厭わしく思うのです
汝なしに降りかかる雨の滴は
火花が体に降りかかるようなものなのです
冷たい風が体に当たるのです
しかし心では火が燃え盛っているかのようなのです
異郷に於いて、一体、どうして心は楽しむでしょうか
心の中に故郷の思い出が満ちているというのに

と歌われ、そして次のようにこの詩は結ばれる。

手術刀のように心に突き刺さるのでした
その者のこの痛々しい訴えは
その苦悩の内には感銘もあったのです
その声を聞き胸を押さえてしまったのです
ずっと驚きがあったのです——一体
この旅人は何処の人なのかと
そして注意深く見てみると
それは我らが友人ハーリーであったのです

この詩に付けられたハーリーの註によると、この異郷にある者、即ちハーリー自身の描写は、「思わず滴り落ちた」もので、病気やその他の理由でハーリーは故郷に帰りたいと思っていた⁽²⁴⁾。こういう自分の気持ちを素直に詩にしてゆくという所に、自己の個人的内面の表出というナズムの特徴を認めることが出来よう。

1874年7月4日付の『パンジャービー』紙は、ハーリーの「雨季」を高く評価し、次のような

称賛の言葉を送っている。

「インドの国の特徴がこの詩には非常に見事に描かれており、他のマスナヴィーにはこれに匹敵するものは得られないであろう。素晴らしいのは、この詩人が、何ら誇張表現を行わず、美と恋や慎しみのない話をしなかった事である。にもかかわらず、それは詩的想像の最高の段階にまで到達しているのである。」⁽²⁵⁾

(3) 第2回詩会

第2回詩会は6月30日に開催され、詩題は「冬」であった。ブラジ・モーハン・カイフィー (Braj Mōhan Kaifi) はその講演「新しい詩の最初の詩会」の中で、冬という詩題が選ばれたのは、6月の暑さを忘れるためではなかったか、と推測しているが、真偽のほどは定かではない⁽²⁶⁾。

ギャルサン・ド・タッシーの引用している『パンジャービー』紙 (1874年7月4日付) は、第2回詩会は盛会で、10～12人の詩人が参加した、としているが、カイフィーは、上記の講演の中で、9名の詩人が参加した、としてその名を挙げている。何れにしても、第1回詩会を上回る詩人の数であり、この詩会に対する関心の高まりが感じられる。

この第2回詩会には、アーザードは、「冬」 (Zamistān) という143詩句から成るマスナヴィー詩を発表した。冒頭の部分を次に訳出しておく。

来たれ、冬よ、汝は雪の王
雪の王、雪の国の皇帝
汝の栄光の玉座は世界とは異なるのです
そして汝の宮殿はヒマラヤの山の頂にあるのです
東から西まで汝の国は何処も白く
栄光の旗が白雪のように舞っているのです
世界に対して汝が軍勢を率いて現われるとき
山や砂漠を常に転覆させながら現われるのです
強風が汝の旗印をはためかしながら現われ
栄光の軍隊に道を教えながら現われるのです
瞬く間に世界征服を行ない
汝が現れるや世界の印象は一変するのです

第1回詩会の「雨季」と同様、この「冬」という詩も叙景を目的としており、アーザードは、様々な角度から冬の情景を描き出そうと努めているが、詩の構成は、かなり荒いと言わなければならない。まず、アーザードは、冬の到来で荒涼となった花園について述べ、そして、冬にも良い点

があると冬を弁護し、続いて、寒さに震える人々の様子、冬の夜の素晴らしさ、冬の夜の幻想と話が展開してゆく。この中で、人々の様子を描写した箇所は、次のように、非常に写実的である。

寒さのために心は胸の中で震え

子供は両親の脇にもぐり込むのです

或る者は色鮮やかな掛け布を纏って坐っているのです

翼を伸ばしてまるで何か夜鶯^{ブルブル}がとまっているかのように

或る者は寒さのために掛け布団を纏って坐っているのです

或る者は敷布を布団にして坐っているのです

少し布団から、今、顔を出して横たわっているのです

しかし、火鉢を脇に抱えて横たわっているのです

身をちぢめて坐っている者達もいれば、震えている者達もいるのです

寒さに震えている者達もいれば、喘いでいる者達もいるのです

スースーとしたり、シーシーとしたり、ヒューと吹いたり

皆、丸くなって坐り、そして真ん中には火鉢があるので

冬の幻想の部分では、歴史上、文学上有名人な人物への言及が行なわれているが、約30詩句からなるこの部分は、本来の詩題とは何の関係もない。ペルシャ、インド、ヨーロッパの有名人の名を盛り込んだ、次のような詩句が、徒らに羅列されているだけである(27)。

何処かジャムシード王は坐ってその酒杯を眺めているのです

しかし自分の行末はさっぱり分からないのです

時にはマフムードがジャイパールの頭上に現われるのです

インドの国にまるで地震が来たかのようなのです

時にはジンギスカン、時にはフラグが現われるのです

まるで家を襲いながら、誰か、盗賊が現われるかのように

この後、アーザードは、再び、冬の到来による自然界の変化を描写し、「知識と学識の花園」西欧の冬に簡単に言及し、この詩を結んでいる。

『パンジャービー』紙（1874年7月4日付）は、アーザードの詩の4分の3はその師匠達の翻訳であり、盗作も行なっていると非難し、そして、次のように批判している。

「アーザード氏は、誰も一度も見たことがなく、話しているのを聞いたこともないような事柄について述べたのだ。アーザード氏は、決して証明されないような一つの夢の絵を描いたのだと言えるだろう。例えば、一体我が国が、川の水が氷となってしまう、舟なしでも人々が川を渡る

ようになる程寒くなったことがあるだろうか。我々は、自分の国の風景の絵を見たいと思っているのに、アーザード氏は、寒い国々の鹿が引く車話をし、いつも雪で覆われている国々の話をしたのだ。そして奇妙なことに、冬の厳しさによって悪魔の帝国が推測出来るなど書き記しているのだ。」⁽²⁸⁾

アーザードに対する批判は、さらに、7月25日付の『パンジャービー』紙でも行なわれている。そこでは、アーザードのマスナヴィー詩「冬」の半句が50近く取り上げられ、語学的、内容的におかしな点に対して嘲笑的に批判が加えられている⁽²⁹⁾。

（4）第3回詩会

第3回詩会は8月3日に開かれた。前2回の詩題が、「雨季」、「冬」という自然に関するものであったのに対し、第3回詩会の詩題は、「希望」であり、これ以降、第9回詩会まで抽象的なものが詩会の詩題とされている⁽³⁰⁾。

この詩会には11名の詩人が参加した⁽³¹⁾。ギャルサン・ド・タッシーによると、ラホール以外の町からも詩人が来、来られない者は作品を送ってきた。中には古臭い内容の詩もあったが、多くは政府の望んでいるような内容の詩であった⁽³²⁾。

この詩会でアーザードが発表したのは、150詩句から成る「希望の朝」(Ṣubḥ-e ummīd) というマスナヴィー詩である⁽³³⁾。この詩は次のように始まる。

朝が青い空を明るくした時

夢の寝台から私は伸びをして起き上がったのです

目をこすって世界の広がりを目をやると

あらゆる物に世界の生命の顔が見えたのです

遠くに届く目が見渡す限り

目の前には秘密の自然の花園が広がっていたのです

或る所では山の麓が一面に緑なし

その上の大地の床は天上の花園の威光であるのです

その葉はどれも目の前に鏡を持ち

それらの中には心の願いの実が姿を現わしているのです

願いによって優美な花が一面に咲いているのです

それらから願いの果実が一面に現われ出るのです

至高天と親友になる程の山の頂が

願望の長さよりも長い道を持っていたのです

山の方から楽の音が聞こえて来、心引かれた「私」は山を登る。山頂には花園があり、泉がある。
そして――

大理石の石が川の畔にあり
その上に妖精も羨む美女が手に花の杖を持ち
顔の色を花園の花で輝かせながら
片足を川につけて坐っていたのです
その上には傘の代わりに影を投げかける緑の若木があり
北風が脇に立って花を降りかけているのです
花園の若者達は立って宴席を整えており
春の花の敷物を立って広げているのです
彼女の頭には王冠が載っており
ダイヤモンドの石の代わりに花々で溢れており
その花の一つ一つは、しかし、異なった姿をしており
各々の目に別々の色を見せているのです
それから各人は各人の芳香を得
各人の頭はそれから新しい類の喜びを得るのです
その顔は願望の顔の鏡であり
蠟燭のように四方にその輝きは一つであるのです
一方には理性、一方には方策が立ち
前には忘却の酒の盃を持って感銘が立っているのです
各人の心に彼女は光によって別々の輝きを与え
成功の絵を別々に示しているのです
その魔力の水仙の目は効き目を持っており
その視線は至る所で心に降りかかり
あらゆる人は思うのです、私に合図をしたのだ、と
あらゆる心は身を震わせるのです、私を呼んだのだ、と
彼女の宮殿には王や乞食が来ていて
自分の願いの装束をも広げており
次々と朝の風が往来し
希望の芳香を一人一人に嗅がせてゆくのです

この光景にアーザードは驚く。見るとフマー鳥がおり⁽³⁴⁾、フマー鳥はアーザードに、ここは希望の王女の宮殿であると教える。

このような、外界から離れた花園、泉、そしてそこに美女がいるという設定は、従来のマスナヴィーによく見られるもので、ここまでの部分は伝統的なマスナヴィーの雰囲気を持っている。

さて、この「希望の朝」は、この後、以上のような空想的な場面から一転して、希望こそが、秋の水不足で困り果てている農民や庭番、困難な道を旅する商人、戦場の戦士、勉学に打ち込む学者や学生、そして旅行者を支え、助けるのだ、と歌い、最後に、詩人について触れ、あたかもパンジャーブ協会の詩会に参加する詩人達を励ますかのように、次のような詩句でこの詩は結ばれている――

詩の理解者が至高天の下に現われることでしょう

けちをつける人がいれば詩を解する人も現われることでしょう

他の誰かが見れば、称賛が得られることでしょう

今日誰も見なかったのなら、何時かは見ることでしょう

ギャルサン・ド・タッシーは、10月3日付の『パンジャービー』紙の記事を次のように紹介している。

「記者が述べている所では、アーザードの朗読の仕方は関心の的であったが、しかし、その詩の内容によっては、改革派の希望は達成されなかった。相変わらずの薔薇と夜鶯^{フルフル}の恋物語、相変わらずの酒と酩酊の話。この詩人に大きな期待を抱いていた人達は、大きく失望してしまったという。アーザードのその詩の題名は、『希望の朝』であると思われる。」⁽³⁵⁾

アーザードは、過去の繰り返されてきた詩題に囚われることなく、新しい主題でも詩作すべきであると主張したのであって、薔薇、夜鶯^{フルフル}、酒の話をしてはならないと主張してはいない。また、詩の中で、アーザードは、薔薇、夜鶯^{フルフル}、酒という言葉を使っているが、それを詩の中心にしている訳ではないので、「改革派」はアーザードを誤解していたと言わなければならない。しかし従来の詩とは異なる、何か新鮮な詩を求める人々にとっては、アーザードのこの詩の、伝統的な詩想で描写された前半部は、確かに失望を与えるものであったと思われる。

アーザードの「希望の朝」への批判は、さらに、『パンジャービー』紙（10月10日付）でも行なわれている。これは、ゾウクの弟子と称する者によって執筆されたもので、「希望の朝」の25の詩句と一つの半句を抜き出し、各々に批判を加え、その中で、「ねえ君！君の気質は詩に全く適さない。もう十分自分を卑しめたのだから、手を引いて、詩人達の名簿から自分の名前を消してもらいなさい」とまでアーザードを嘲笑している⁽³⁶⁾。

尚、8月8日付の『パンジャービー』紙によると、この詩会で最も評判の良かったのは、デリーのミルザー・アシュラフ・ベグ（Mirzā Ashraf Bēg）という人の「希望の新春」（Nau bahār-e ummīd）というマスナヴィーであるが、これに対する『パンジャービー』紙の次の評言は、この頃既に、この後の文学運動の基準となるような考え方が明確となっていたことを示している。

「このマスナヴィー全体が非常に魅力的で、どれ程称賛しても足りないぐらいである。描写法には、純粹さ、美しさそして情熱が見られ、そしてそれと同時に、その分り易さと簡明さたるや、上下を問わず誰もが皆それから一様に面白味を得ることが出来る程なのである。あらゆる点を、優れた技巧で描いているので、どのような悪趣味な者にもそこに完璧さが目に入るのである。最も高尚な思想を最も簡明な形式で表現したのである。もし一方に觀念と想像の中に美しさがあるとするなら、他方では、直喩、隱喩が適切に用いられているのである。」⁽³⁷⁾

ハーリーもまたこの第3回詩会に参加し、「希望の喜び」（Nashāt-e ummīd）という、79詩句から成るマスナヴィーを発表している⁽³⁸⁾。

おお、我が希望よ、我が命を育む者よ
 おお、我が心を燃やす者、我が事を成就させる者よ
 我が盾、そして我が心の避難所
 苦しみと災いの時の我が支えよ
 喜びのそして悲しみの時の我が友
 山のそして荒野の我が仲間
 日々の悲しみを切り捨てる者
 満ち足りぬ心を支えてくれる者
 心に何か苦しみが降りかかった時
 汝の慰めによって我等は安らぎを得たのです
 汝は異郷にあっても決して見捨てなかったのです
 汝は決して頭から保護の手をどけなかったのです
 心がもし災難に悲しんだなら
 汝は満足の宝庫を開いてくれたのです
 汝によって貧しい者の心は失望せず
 汝によって病人は生きる願いを持つのです
 汝こそ悲しむ心の妙薬
 汝こそ隔てられた恋人の信仰なのです

第1回詩会に発表された「雨季」という作品の中で、ハーリーは、ムスリム以外の人々の事をも詩の中に取り入れていたが、この作品に於いても、次のように、ノア、ヨセフ、カイス、ファルハドといった従来のウルドゥー詩によく登場する人物達と並んで、ラーマ、バーンダヴァ（バーンドゥの息子達）といった、ヒンドゥー叙事詩『ラーマヤナ』、『マハーバーラタ』の登場人物、そしてヒール、ラーンジャーというパンジャブの恋物語の主人公たちの名も盛り込んでいる――

汝こそノアの箱舟の支えだったのです
汝こそ井戸の中のヨセフの恋人だったのです
汝はラーマと共にいくさに赴き
汝はパーンダヴァとも一緒に森をさ迷ったのです
汝は常にカイスの心を慰め
心が狼狽した時はいつもしっかり支えたのです
ファルハードの物語は完結しましたが
しかし、汝の雄弁にはずっと喜び続けていたのです
汝こそがラーンジャーのその願いをしっかりと結ばせ
ヒールは離れていても側に居るかのようなのでした

このような詩作態度は、ハーリーが、新しいウルドゥー詩を、ムスリム以外の人々にも迎え入れられるような、広汎なものにしようと考えていたことを示していると言えよう。

この後、ハーリーは、人は各々何らかの願いを持って生きており、希望があるからこそ生きてゆけるのだ、と歌い、次のようにこの詩を終えている――

絶望の大群のあるとき
悲しみの雲がもくもくと現われるとき
勇気の腰は砕けてしまい
剛気の心は消え入ってしまうのです
不安と我慢の間に戦争が起こり
世界の長さが短く見えてしまい
心に思われるのです、毒を飲もうか、と
それとも衣を引き裂いて出て行こうか、と
心はかまどのように沈み込み
絶望は狐火のようにおどろかすのです
時には運命への不平があり
時には努力への嘲笑があるのです
時には天との闘いが決意され
時には運命への嘲りがあるのです
遂に心は言うことをきかなくなるのです
このような困難を汝こそ解決するのです
耳に汝の足音がするや否や
絶望はすぐさま荷物をまとめたのです

絶望と一緒に落胆も去り

あらゆる悲しみは樟脳のように消え去ったのです

汝には生命の安息の秘密が潜んでいるのです

ハーリーを見捨てたりしないように、おお、希望よ

(5) 第4回詩会

第4回詩会は、ギャルサン・ド・タッシーによると9月3日に開催され、数多くの詩人が参加し、来られなかった者は、作品を送ってきた。アーガー・ムハンマド・バーキルの「自然の詩」^{ネーチャー}によると、詩会の開催されたのは9月1日で、参加した詩人は13名である⁽³⁹⁾。

この詩会の詩題は、「愛国心、郷土愛」(ḥubb-e waṭan)で、この詩題を提案したのはハーリーであった。

アーザードは、この詩会のために、195詩句からなるマスナヴィー「愛国心」(Ḥubb-e waṭan)を発表した⁽⁴⁰⁾。

この詩は、次のように、愛国心とは単に国を想うこと、国から離れようとしめないこと等を意味するのではない、という主張から始められている。

ペルシャの経験豊富な者達全ての言葉があるのです

そしてそのペルシャの詩人達はこう述べているのです

愛国心はソロモン王の国よりも素晴らしい

祖国の刺はヒヤシンスやメボウキよりも素晴らしい、と

心の君主のこれこそ普き命令であるけれども

そしてこれについては世界中が一致しているけれども

しかし、深慮の国の制度は少し異なるのです

この帝国には別の統治法方が必要なのです

愛国心とは、庭から

脱け出た薔薇が別離の傷で土と化してしまうことを言うのではないのです

愛国心とは、水の中にもしいなければ

魚の生命がどうしてもうまくいかないということでもないのです

或いは、真珠が海を思い出して苦しんでいれば

それもまた愛国の徒の中に含まれるということではないのです

愛国心とは、見識ある人々が

家で身の心と心の安らぎを祝祭^{イーデ}と考えることでもないのです

冷たい水が前にあり、暖かいパンがあり

そして眠る時には眠るための布団が柔いということではないのです
これは決して愛国心ではないのです、花園の
恋狂いの夜鶯^{ブルブル}が頭で恋を燃やし
遂には花園を捨てて罌に捕えられ
花園を思って頭を砕いて命を投げ出すということでは
愛国心とは、理性ある人々が
祖国を思って時には激し、時には叫ぶことを言うのでもないのです
子供のようにいつも激しく泣き
そして父母のために身悶えするということでは
妻や家族との別離が耐えられず
そして友との別離がとても心に辛く思われるということでは
愛国心とは、家に居て
子供達の口に四六時中接吻することを言うのではないのです
誰かが膝に居て誰かが首輪となり
妻が、主人はとても私を愛している、と言うことでは
旅にあって友や仲間のために泣き
そして時には街や商店街のために泣くことでは
おお、友よ、これは石と煉瓦の愛なのです
この愛は美しくなく、醜いのです

この後、アーザードは、デカンに招かれたデリーのシタールの名手が、デリーを出ようとした時、デカンにはジャムナー河のような河もジャーマ・マスジドのようなモスクもないのを知って、デリーに止どまる、という話をし、次のように詩を続けている。

さあ、諸君に教えましょう、愛国心とは何であるのか
それが如何なる花園であり、それが如何なる花園の風であるのか
それは神の御恵みであり、人々の上に普くあり
それは普き悦びであり、それによって世界は喜ぶのです
それは太陽の光であり、それによって世界に光があり
それは光であり、その現われはあらゆる物の上にあるのです
愛国心とはあの清浄なる光の輝きであり
そしてその光で土の世界は輝くのです
太陽の中にこの光があればそれを光線と言い
もし心から姿を表わしたなら愛国心と言いましょう

全てに恩情の目を向ける者は
そして心から全ての人の幸せを願う者は
旅路をさ迷ってしようと、家に居ようと
自分の手を利益の懐中に入れていようと損失の中に入れていようと
如何なる状態にあっても祖国の人が大切に思われる人は
そして善であれ悪であれ身と心の在り方が大切に思われる人は
その人こそ祖国愛の国の統治者であり
その人こそ王冠、王座があろうとなかろうと王であるのです
そしてヨセフの胸中にあった祖国への想いの
そのしるしは心の宝石の中に見るとよいのです
しかし、この秘密は真理の徒に聞くとよいのです
その方法は神秘主義教団の長老に聞くとよいのです
時計のようにいつも動いている心は
いつでも祖国の方に顔を向けるのです
それは祖国愛の途を懸命に行き
それは別離の悲しみに鐘のように泣くのです
即ち、自分の祖国の在り処を何処で知ろうか
私はどの花園の夜鶯^{フルフル}であったのか、何処で捕われてしまったのか、と

このような説明では、一体どのような祖国愛が望ましいものなのか、全く分からないが、この後に続けられているヨーロッパの二つの国の国境争いで自分の国の領土を増やすため命を投げ去って愛国者の話、ローマへ侵略してきた敵軍に対して勇敢に立ち向かう市民の話、国のために戦ったルスラムのようなベルジャの戦士の話等から、祖国を思うことだけが祖国愛なのではなく、はるかに重要なのは、祖国のために身を投げ打って何かを為すことであると主張しようとしていることが分る。そして、アーザードによれば、このような積極的な祖国愛こそが西欧に隆盛をもたらしたのである――

祖国愛はその光に於て太陽と同じ
そして太陽は常に姿を現わすのです
それにもまた昼夜のような変化があり
一方に光があれば他方に闇があるので
今日、その太陽は西欧の頭上にあり
そしてインドの夜は黒い顔の上にあるのです
彼の地の会計簿の計算は少し異なっていて

頁一枚一枚が太陽の印を持っているのです
命知らずがいれば祖国への献身者であり
そして決意の剣を常に輝かせているのです
高慢な者達の上に威光が打ち立てられるようにと
そして国の近き遠きに支配が及ぶようにと
彼等は金や命を少しも財産だとは思っておらず
自国の旗に威光を与えているのです

学者や商人は祖国のために活動しており、医者新しい医薬を求めて世界を巡っている、とアーザードは述べ、ムガル皇帝ファッルク・スィヤルの病気を治したイギリス人医師の話に言及する。この医師は、病気を治した礼として金品を与えようとした皇帝に対し、自分の国の商船のための港と商品に対する税の免除を要求する。この医師の愛国的な行為によって、彼個人には金銭的な利益はなかったが、イギリスには計り知れない程の利益があった、という話である。

そしてアーザードは次のように、積極的な祖国愛の必要を説いてこの詩を結んでいる。

おお、祖国愛の太陽よ、汝は今日何処
汝は何処、今日、全く姿が見えないのです
汝なくして世界は目の中で闇となり
そして心の秩序が狂っていくのです
汝なくして胸を痛めている人々全員が死せる魂となり
そして心の熱情が胸の中で消えつつあるのです
何故心の中で汝の情熱は冷たくなってしまったのでしょうか
何故全ての汝の灯りが沈黙してしまったのでしょうか
祖国愛の商品の飢饉は何故なのでしょう
私は驚くのです、今日のその欠乏は何故なのでしょう
時の歩みはここでは少し逆になってしまったのです
祖国愛の代わりにここには祖国嫌悪があるのです
汝なくしてインドの国の家には灯りがなく
灯りの代わりに胸の傷が燃えているのです
何時まで暗い夜に隣れな様でい続けるのでしょうか
おお、太陽よ、こちらにも恩情の眼差しを向けるのです
世界から暗い心が全て消え去るように
そしてインドが汝の光で永遠に満ち溢れるように(41)
愛によって全ての人の冷めた心が互いに熱くなり

そして同国の人々は互いに同情的となるように
自分の祖国に富が満ち溢れるように
そして国家には進歩が満ち溢れるように
全ての人が統治者達のために命を捧げるように
そして敵の首には短剣の刃が突きつけられるように
学問、技術で人々に輝きを与え続けるように
そして協会に出席して集会を行ない続けるように
全ての人の盃が祖国愛の熱情で満ちるように
あらゆる人の心が情熱で溢れるように

アーザードのこの詩が、どのように評価されたかは、今のところ、不明である。

さて次に、この詩会の詩題「郷土愛、祖国愛」の提案者であったハーリーがこの詩会で読んだマスナヴィー「祖国愛」（Hubb-e waṭan）を見てみよう。この詩は215詩句から成るかなり長いマスナヴィーで⁽⁴²⁾、まず、星、花園、山の心楽しませる情景、川の畔の涼風、夜鶯の朝の鳴き声、星に満ちた月夜、春のそよ風等への呼びかけからこの詩は始まる。ハーリーは訴えかける——故郷に居た時、諸君は私の心を慰めてくれたのに、故郷を離れた今、諸君を見ても心は安らがないのだ、と。

おお、故国よ、おお、我が天国よ
汝の天と地はどうなってしまったのでしょうか
昼と夜のあの情景は最早ないのです
あの大地、あの空は最早ないのです
汝との隔たりは悲哀の源
汝が離れて休らぎも離れてしまったのです
魔物と人間の生命なのです、汝は
鳥と魚の世界なのです、汝は
汝によってこそ植物には成長があり
木は汝なくして緑とはならないのです
全ては汝によってこそ成長するのです
全てを汝の水と空気は喜ばせるのです
汝の一握りの土と引きかえに
もし天国が得られるとしても、私は決してそうはしないでしょう
命が肉体から離れない限り
如何なる敵も故国から離れたりしないように

このように郷土への愛着の例をハーリーは、アーリヤ人に征服されても故郷を離れず、奴隷となっても故郷に残った人々、父の命令によって森に赴いたが、決して故郷のアヨーディヤーを忘れなかったラーマ王子、マホメットと共にメディナに移住したが、メッカのことを思い続けた人々、エジプトの支配者となっても故国カナーンを想っていたヨセフによって示すが、その後、話を転じて、郷土に愛着を持っているだけでは不十分であると主張する――

おお、心よ、おお、故国の^{しもべ}奴隷よ、気をしっかりと持つのです

深き夢より少しは目覚めるのです

おお、利己の酒に酔った者達よ

家の敷居に口づける者達よ

その名が郷土愛なのですか

汝が抱いているような愛情の名が

時には子供のことが思われ

時には友への悲しみが苦しめるということが

自分の町のことが時には思い出され

町の人達への思慕の念が時には現われるということが

心には路と商店街の刻印があり

目の中を戸口や壁が動き回るということが

一体これが故国への愛なのですか

これもまた愛の中の何らかの愛なのですか

これに於いては獣も人に劣るものではないのです

動物や鳥はそれを欠いている訳ではないのです

石は異郷にあっては粉々となり

木は別離にあっては枯れてしまうのです

カーブルに行くとマンゴーの苗は

決して成長することが出来ないのです

カーブルからここへマルメロやザクロが来ても

決して実をつけることはないのです

魚は水から離れてしまうと

命から手を洗ってしまうのです

火から火トカゲが離れると

それには最早生きる力がないのです

馬は畑から離れると

その生命は危うくなってしまうのです

牛や水牛、ラクダや山羊は
皆、自分の居場所に居て幸福であるのです
もしそれを郷土愛だと言うのなら
我々に動物は少しも劣るものではないのです

このようにハーリーは、郷土に対して愛着を持っているだけでは動物と何ら変わるところはないと断じる。では、ハーリーにとって、人として持つべき郷土愛、祖国愛とは如何なるものでなければならぬのか。ハーリーは言う――

誰か自分の民族（qaum）の同情者がいれば
その人を人類の一員と思うのです
その人こそ人と呼ばれるにふさわしく
その人をこそ動物より上に置けるでしょう
民族への如何なる打撃も見ることが出来ず
民族の不幸を見ることが出来ず
民族に比べれば命すら惜しくなく
民族以上の何物もなく
その幸福を魂の安らぎとし
そこに正月があればこちらには祝祭があり
その悲しみを悲しみの源とし
そこにもし悲運があればこちらには悲嘆があり
自分の威厳をすべて忘れてしまうのです
兄弟達が卑しめられているのを見ると
その上に天の災いが降りかかると
自分の安楽に砂をかけてしまうのです

同胞に対する同情、民族との一体感こそ必要なのだ、とハーリーは説き、

何を一体、のんびりと坐っているのですか、同国の人々よ
立ち、祖国の人の友人となるのです
男ならば誰かの役に立つのです
さもなくば食い、飲み、立ち去るのです

と同胞に対する積極的な行動を呼びかける。

皆、一本の枝の葉と果実なのです

その中には乾いたのもあれば濡れたものもあるのです

皆、同じ源によって結びついているのです

悲しんでいる者もいれば喜んでいる者もいるのです

幸運なる者よ、不運なる者のことを思うのです

喜ぶ者よ、悲しむ者を喜ばせるのです

目覚める者よ、眠れる者を目覚めさせるのです

泳ぐ者よ、溺れる者を救い出すのです

ここで注意すべきは、ハーリーが、宗教、宗派の違いを考慮してはならない、と主張している点である――

汝がもし国の幸福を願っているのなら

如何なる同国人も他人だと思つてはならないのです

その中のムスリムであれヒンドゥーであれ

仏教であれブラフモ（・サマージ）であれ

ジャアファリー派であれハナフィー派であれ

ジャイナ教であれヴィシュヌ派であれ

全ての者を優しい眼差しで見るとのこと

全ての者を目の瞳だと思ふのです

さらに続けて、ハーリーは、国の独立には国民の団結が必要であり、団結心を失ったからこそインドは侵略され、遂にはイギリスの支配下に入ってしまったのだと歌う――

国は団結によって自由であるのです

町は団結によって満ち溢れるのです

インドにもし団結があったなら

どうして他所者の足蹴を受けたのでしょうか

民族が団結をなくしてしまった時

自分の財産を手離してしまったのです

各人が互いの敵となり

他所者は汝に目をつけ始めたのでした

兄弟から兄弟が離れてしまい

来るはずではなかった災難がやって来たのでした

繁栄の足元が覚束なくなり始め
国に全ての者が手を出し始めたのでした
時にはトゥーラーン人が家を襲い
時にはドゥッラーニー人が富を奪ったのです
時にはナーディルが大虐殺を行ない
時にはマフムードが奴隷としたのです
一番最後に勝負をものにしたのは
西欧の一つの文明の民なのでした
これもまた汝への神の褒美であったのです
汝がこのような民族と接するようになったのは
さもなくば汝は口に出すことも出来ず
頭に降りかかったものを担いでいたことでしょう
国は足で踏みにじられたのです
安らぎを誰か他所者から得たでしょうか

このような先鋭な政治意識、反英感情の見事な表現の後、ハーリーは、同胞に対して無関心な者達に対して批難の目を向ける。まず、攻撃的とされるのは、空腹に苦しみ、死んでゆく同胞には目もくれず、富に溺れている金持ち達であり、次いで、互いに争ってばかりいる学者、医者、知識人、詩人、書家達である。そして知識や技術を誰にも教えず、一人占めしてしまう占い師や職人、民族の期待がかかっていたのに、その期待に応えず、獲得した知識を自分の心の中にしまいこんでしまうB.A.取得者やM.A.取得者が俎上に載せられ、知識を人々に与える努力をせよ、という主張が行なわれる――

数日は安楽をとりやめ
腹の中にあるものを全て吐き出すのです
知識を隅から隅まで安価なものとするのです
インドをイギリスとして示して見せるのです

この後、ハーリーは現在、フランスやイギリスが繁栄しているのは、愛国的な人々の働きの結果であると述べ、次のように訴えてこの詩を終えている――

全ては人の為すことなのです、同胞よ
汝等によっても為し得るでしょう、男となったならば
悲しみを捨て、情熱を持つのです

もう十分眠ったのです、起きるのです、目を覚ますのです
隊商は汝等よりずっと先へ行ってしまったのです
一番最後にどうして取り残されていくのですか
隊商にもし追いつきたいのであれば
国と民族の幸福を望むのです
もし名誉をもって生きたいのであれば
兄弟達を恥辱から救い出すのです
彼等の名誉は汝等の名誉
彼等の恥辱は汝等の恥辱
民族の一員が卑められていれば
君主であっても取るに足らないのです
その民族が世に傑出しておれば
その者は貧困にあっても名誉を保つのです
もし民族の名誉を望むのであれば
彼等の中に行って学問と技術を広めるのです
生まれの誇りや家柄の自慢
このような仕来たりは今や世界から消え去ってしまったのです
今やサイイドの誇りは正しいものではなく
パラモンはシュードラに優越しないのです
家柄の誇りは姿を消し
家系の根は切られてしまったのです
民族の名誉は今や技能によるのです
知識や或いは金銀によるのです
数日の内に時代が来るでしょう
技能を持たぬ者は施しすら得られないような時代が
このような昼夜がいつまでも続く訳ではないのです
私の今日の話を覚えておくのです
もしハーリーの言葉を聞いていないのなら
何者かが言っていたなどと言ってはならないのです

以上のようにハーリーは、生まれや家柄を誇るような時代は終わり、技能、学問、富が優劣の尺度となる時代が到来したという時代認識に基づいて、学問、技術の普及による民族の発展という思想を詩の形で説いたのであった。「祖国愛」という詩題を自ら詩会の題目とするよう提案したハーリーは、並々ならぬ思いを抱いていたのであろう。

ギャルサン・ド・タッシーは、1874年10月3日付の『パンジャービー』紙の、この第4回詩会に対する論評を紹介しているが、それによるとハーリーのこの詩が読まれた時、遅くなっていたので、人々は疲れ果てていたが、それを注意して聞いていたばかりか、大変熱心に聞いたとのことである⁽⁴³⁾。

(この章、続く)

註

- (1) ムムターズ・アリーは、アーザードの弟子であったようである。『アーザード詩集』序文には、自分はアーザードの警咳に20年接している、とある。(1898年にムムターズ・アリーによって出版された『アクバルの宮廷』初版の序文では約15年となっている。)
- (2) 初版に於けるマスナヴィーの順序は、シャイク・ムバーラック・アリーより出版された版でも踏襲されている。
尚、このマスナヴィーの一つに“Sharāfat-e ḥaqīqī”というのが収録されているが、これは詩会で発表されたのかどうかは不明。
- (3) 「ベンへの呼びかけ」はムムターズ・アリー版では、4詩句より成る短詩で、年老いたアーザードの杖となって欲しい、とベンに呼びかけている。イブラーヒーム版ではどうなっているのか不明。
- (4) サルワリーは、この論評は、アブドゥル・カーディル (‘Abd al-Qādir) の筆になるものと推定している。
- (5) サルワリーは、35篇としている。
- (6) シャイク・ムバーラック・アリー版(アーガー・ムハンマド・ターヒルによる第3版)そしてムムターズ・アリー版では、グラーム・ハイダル・ニサル(Ghulām Ḥaidar Nithār)の「ウルドゥー詩」(Naẓm-e Urdū)という短評は巻末にあるが、サルワリーによると、イブラーヒーム版第2版では、「詩と韻文についての考察」と1874年4月19日の講演との間に置かれている。イブラーヒーム版初版については不明。
- (7) ムムターズ・アリー版では、この日付は1874年5月8日となっている。
- (8) 字句の違いの他に、シャイク・ムバーラック・アリー版(アーガー・ムハンマド・ターヒルによる第3版)では、マスナヴィーが、連に分けられているのに対し、ムムターズ・アリー版では、詩句が連に分けられていない、という表記上の違いがある。
- (9) Aslam Farrukhī, *Muḥammad Ḥusain Āzād: Ḥayāt aur Taṣānūf*, vol. 2, Karachi, 1965, p.487.
- (10) 因みに、ムムターズ・アリー版『アーザード詩集』も『アクバルの宮廷』初版も、Rifāḥ-e ‘ām pressというムムターズ・アリーの印刷所で印刷されている。
- (11) 無論、このテキストも発表当時の形のままであるとは言えず、加筆訂正されている可能性がある。今後、研究が必要である。
- (12) 「力の夜」、「全能の夜」などとも訳せよう。
- (13) ムムターズ・アリー版では、124詩句ある。詩の構成はほとんど同じであるが、詩句が大幅に異なっている。例えば冒頭は次のようになっている。

おお、太陽よ、朝から出ているのです、汝は
世界の活動の中に一日中いたのです、汝は
騎手には巡回がいつもあるけれども
日が暑かろうと寒かろうと旅が彼の仕事なのです
しかし見るのです、汝の顔色が青白いのを

- 輝く顔に苦しみの埃があるのです
 おお、太陽よ、夕刻になるのにあまり時間がありません
 そして汝もまた終日の仕事に疲れ果てているのです
 山の麓に朝まで横になり
 雲の布団に顔を覆って眠るのです
- (14) ベーナズィールとバドレムニールは、ミール・ハサン (Mir Hasan) の有名なマスナヴィー『叙法の魔術』 (Sihr al-bayān) の主人公。尚、バドレムニールとは、輝く満月の意。
- (15) 『アーザード詩集』 (ムムターズ・アリー版) 序文。
- (16) ギャルサン・ド・タッシーやムハンマド・サーディクは、4月19日の講演会を第1回詩会としているが、5月30日の会合を第1回詩会とすべきであろう。
- (17) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, Karachi, 1975, p.33.
 尚、原文では、パンジャブ・ユニヴァーシティとしてあるが、この頃はまだカレッジ。
- (18) *op. cit.* p.34.
- (19) ムムターズ・アリー版も98詩句あるが、字句の異なる詩句がいくつかある。
- (20) ハーリーの詩のテキストは、下記の詩集を用いるが、発表当時と同じであるかどうかは不明である。
 Iftikhār Aḥmad Šiddīqī (ed.), *Kulliyāt-e Naẓm-e Ḥālī*, vol.1, Lahore, 1968.
- (21) M. Tahir Jamil, *Hālī's Poetry: A Study*, Bombay, 1938には292 linesとあり、Giyān Chand Jain, *Urdū Mathnavī Šimālī Hind meṇ*, Aligarh, 1969では145詩句と記されている。
- (22) スルターンの井戸とはラホールにある井戸の名前。
- (23) サルワンの歌とは、ヒンドゥーの女性サルワンとイギリス人の恋を歌った歌のようである。
- (24) ハーリーは、パーニーバット生まれで、1872年にラホールに来、パンジャブ州出版局で働いていた。
- (25) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, p.36.
- (26) カイフィーのこの講演は、その著書である *Manšūrāt* (Delhi, 1945) に収められている。
 尚、カイフィーは、この第2回詩会を第1回詩会と誤解している。
- (27) ムムターズ・アリー版には、この冬の幻想の部分がない。この他、いくつかの詩句で、字句が異なっている。
- (28) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, p.35.
- (29) Muḥammad Šādiq, *Āb-e Ḥayāt ki Ḥimāyat meṇ aur Dūsre Mezmān*, Lahore, pp.83-92.
- (30) アフマド・カーンに、「世界は希望によって立つ」(1872年)、「希望の喜び」(1873年)という有名なエッセイがあり、希望という詩題が選ばれたのはその影響かもしれない。
- (31) 詩人名については、タバッスム・カーシミーリー編集の『アーザード詩集』に収められているアーガー・ムハンマド・バーキル (Āghā Muḥammad Bāqir) の「^{ネーチャー}自然の歌」を参照。
- (32) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, p.36.
- (33) ムムターズ・アリー版も150詩句ある。字句の異なる詩句がいくつかある。
- (34) フマー鳥は伝説上の鳥。その翼の影の下に入った人は王になると言われている。
- (35) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, p.38.
- (36) Muḥammad Šādiq, *op.cit.*, pp.93-102.
- (37) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, p.37.
- (38) Tahir Jamilは184 linesとし、Giyān Chand Jainは192詩句としている。
- (39) 二人の詩人の名前の後に、「ペルシャ語で」とあるので、ペルシャ語の詩も発表されたようである。尚、第5回から第8回詩会までに参加した詩人の中にも、名前の後に「ペルシャ語」と記された詩人がいる。
 (この「^{ネーチャー}自然の詩」には、第3回詩会から第8回詩会までの参加詩人の名前が掲載されている。)
- (40) ムムターズ・アリー版も195詩句。但し、字句の異なる詩句がある。
- (41) ムムターズ・アリー版では、「インド」の所が「パンジャブ」となっている。
- (42) Tahir JamilもGiyān Chand Jainも215詩句としている。ギャルサン・ド・タッシーは、232詩句と記

- している。(*Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, p.37)
- (43) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, p.37.

(1990. 9. 17 受理)